ギラルドゥス・カンブレンシスは東洋が嫌いだったのか
——『アイルランド地誌』に表れた「東方」

和　田　葉　子

Did Giraldus Cambrensis detest the East?
——the East presented in his *Topographia Hiberniae*

Yoko Wada

From chapter 34 to chapter 40 of Book 1 of his *Topographia Hiberniae*, Giraldus Cambrensis compared Ireland with the East mainly with regard to the climate, describing the latter as a most unpleasant and unhealthy place to live in. The East described in the *Topographia* seems full of malice in many ways when compared with that portrayed in other works written in the Middle Ages, where it is also depicted favorably since some people believed that it was closer to Paradise.

Did Giraldus speak so ill of the East because he detested it? It seems likely that by contrasting Ireland with the East, he only tried, wittingly, to mock 'The Marvels of the East' (which was very well known all through the Middle Ages) and to compose 'The Marvels of the West' in order to highlight the wonderfully mild climate of Ireland which, as the author wrote, is situated at the westernmost end of the most western islands of Europe.

1185年の春，当時，宮廷で司祭と外交官を務めていたギラルドゥス・カンブレンシス（*c* 1146-1223）は，ヘンリ2世（在位1154-89）の命により王子ジョン（1167-1216）に付き添って，アイルランドへ旅立った[1]。それは，将来ジョンにアイルランドを直接統治させようという王の目

論見によるものであった[2]。ギラルドゥスは1183年すでにアイルランドに行った経験があった上，彼には，イギリスが1160年代後半にアイルランドを侵略した際，勢力となった一族の近い親戚がアイルランドに定住していたため[3]，ヘンリ2世にとって，王子とともにアイルランドに送るのに最適の人物であった。1185年の冬にジョンは先に帰国したが，ギラルドゥスはアイルランドに翌年まで残り，*Topographia Hiberniae*（『アイルランド地誌』[4]）と *Expugnatio Hibernica*（『アイルランド征服』）の執筆に取りかかった。

『アイルランド地誌』はアイルランドの国とそこに暮らす人々の生活についての記録である。第一部はアイルランドの自然について，第二部は驚異と奇蹟について，第三部は土地の住人についての三部から成り，気候，生き物，土地にまつわる不思議な現象や伝承，人々の習慣等，非常に興味深い読み物になっている[5]。著作の目的は，ギラルドゥスが侵略した側の人間として，アイルランドの人々が野蛮で文明とは縁がないことを説明し，侵略行為を正当化するためであったと思われる[6]。第一部ではアイルランドの気候の穏やかさと住みやすさが強調されているのだが，34章から40章にかけて，その素晴らしさと対照させて「東方」が引き合いに出されている。それは，次のようなものである。必要な部分を次に引用する。

第34章　東方と西方の比較

では，東方はこれらにならぶどんな貴重品を自慢し得るだろうか？確かに小さい虫のおかげで，多彩な絹ができる。貴金属もある。光り輝く宝石や，よい香りのスパイスもある。だが健康をそこない命を失うことと比べたら，おなじみの敵，つまりわれわれが呼吸し，またわれわれをつつむ空気がたえず敵意を示していることと比べたら，それが何だというのか？

第35章　東方のすべての要素が有害なこと

確かにすべての要素は，人間が利用するようにと創造されたものでも，かの東方の地ではみじめな死すべき存在に死を強制して，健康をそこない命を絶やすのである。土を裸足で踏むと，死がおそいかかる。不用意に大理石に腰掛けると，死がおそいかかる。生水を飲んだり，濁った水を丈夫でない鼻でかいだりすると，死がおそいかかる。風を楽しもうと帽子を被らずにいると，寒さが頭にしみ込んだり暑さに悩まされて，死がおそいかかる。天は雷，稲妻で脅かす。太陽は熱い光線で煩わせる。＜略＞

第36章　同地での毒の悪しき特質

継子は継母の，夫は彼を憎む妻の，主人は買収された料理人の，毒を盛る手を恐れねばなら

ない。料理や飲み物ばかりでなく，衣類や椅子，腰掛けにも毒が仕込まれている疑いがある。毒は待ち伏せている。毒のある動物が待ち伏せている。すべての有毒なもののうちもっとも強力な人間が，人間を待ち伏せている。

東方には，そうした好ましくないものがあふれているほか，斑のある機敏なヒョウ，処女の愛にとらわれたユニコーン，息が恐ろしいワニ，川に住むカバ，目の鋭いヤマネコ，その小水のみでライオンさえ恐れさせるハイエナが人間の生存を妬み脅かす。

マムシとその仲間が人を脅かす。ドラゴンが脅かす。その一瞥を憎みまた恐れるべきバシリクスも脅かす。「セプス」という小さい毒ヘビも脅かす。このヘビは体が小さい分を毒の激しさが埋め合わせている。肉だけでなく骨も毒でだめにしてしまう。<中略>それゆえ東方にあふれるこうしたヘビは，その種類の分だけ毒があり，不幸を生む。色が多い分もたらす悲しみも多様である。種類が多いぶん災いも多い。

こうしてみると，これほど死の危険が大きい中で，生の確実さとはどういうことを言うのか？あるいはこう言ったほうがよいだろう，これほど死にかこまれた中での生とは何なのか？

第37章　われわれが享受する空気の，比べようもないほどの穏やかさ

それゆえ，東方は有毒な富，有害な財産を持っているかもしれない。だがわれわれは必要を満たすに足り，自然を満足させる「ほどほどの金」を持っており，その空気の穏やかさのみですべての東方の華美とつり合いがとれるのである。

おお，この世で比べようのない神の贈り物よ！ああ，死すべき存在がいまだ理解していない，神によってもたらされたこの上なく尊い恩寵よ！

われわれは天の下で無事に，また剝きだしの大理石の上で安全に寝ることができる。突き刺すような寒気を，また熱で危険な，あるいは悪くなった有害な空気を恐れることはない。そして呼吸によりわれわれが体に入れる空気，またいつもわれわれを包む空気は，健康に適するというありがたい性質を持っているので，われわれと親密な関係にある。

確かに，東方に近づき天の熱に接近すれば，それだけ大地は豊饒に，肥沃になる。同様に，貴金属や宝石，絹織物などあらゆる宝があふれる。人々もまた，空気がたいへん薄いため，体は貧弱だが頭はよい。それゆえ武力よりも毒で勝利をおさめ，武勇よりも学芸によって名声を得るのがならいである。

だが，北西風・西風の吹く地域に向かうほど，土壌はやせるが，空気は健康によくなり，人々は才知では劣るが，より頑強になる。つまりひじょうに濃密な空気によって，耕地はやせ，ミネルヴァは肥えるのである。そして「北の雪の中で生まれる者はみな／戦争においては野放図

で，戦いを愛する」ので，ここの人々はひじょうに大きな心をたいへん大きな体で包む。<中略>

あちらは富にあふれている。こちらはつつましいながら満ち足りて，品を失わない状態にある。あちらには空気の晴朗さが，こちらには健康がある。あちらには機知に富んだ人々が，こちらには頑強な人々がいる。あちらでは毒で，こちらでは武力で戦いがなされる。あちらは学芸，こちらは武芸。あちらでは知が，こちらでは雄弁が愛好される。<略>

第38章　当地にあるものが欠けていてすばらしいこと

爬虫類のほかにも，すばらしいことに，当地にないものがある。まず地震がない。雷鳴を聞くのも年に一度あるかないかである。ここでは雷に驚かされることも稲光があたることもない。滝につぶされもせず地震で大地に飲み込まれもしない。ライオンに殺されもせず，ヒョウに食いちぎられもしない。クマの餌食になることもない。トラに命を奪われることもない。また，敵から贈られた食料でさえ，毒入りではと人を不安にすることはない。継子は継母が，夫は妻が毒を塗った杯を恐れることはない，いかに彼女らに憎まれているとしても。

第39章　東方に毒の泉があること

東方には毒の泉がわきでている。源から遠くになるほどで，毒本来の力は弱くなる。それゆえ東方と当地のあいだの広大な領域を経る際にかなり源からへだたるため，徐々に毒の力は弱まり，当地のようなもっとも遠い地域ではそれはまったく失われてしまう。<中略>

だがあなたはこう言うかもしれない。東方は高価な石や薬効のある植物の根を産出する点で優れている，と。自然が先々のことを考えてたてた計画によって，多くの害悪があるところでは，それを癒すものも多くある。多くの病気があるため薬も多く供給されるわけだ。当地は病にかかる危険がごく少ないため，それを癒すものもそれだけ少ない。

第40章　西方の幸福が東方のそれより好まれるべきであること

それゆえ，平穏が不安定より好ましく，健康維持が治療よりもよく，さまざまな傷を負ってそれを治そうとすることよりも常に五体満足であることがよいぶん，西方の幸福は東方のそれより優れている。南東風より西風が支配的な地域であるほど自然はそこを恵み深い視線で見守っているのだ。[7)] <略>

このように，東方の優れた点を認めながらも，全体としては非常に邪悪なイメージで描かれ

ている。中世の西欧に生きた人々は東方を嫌悪していたのだろうか。あるいは，ギラルドゥスが東洋を嫌っていたからこのように書いたのだろうか。そして，どうして，こんなに長々と東方について述べる必要があったのだろうか。

手がかりを探すために，まず，西欧の中世文学に表れた東洋観を考えてみたい。ギラルドゥスより時代は後になるが，ジェフリー・チョーサー（*c* 1340-1400）は『カンタベリー物語』の「近習の物語」の中でチンギスハン自身と彼の統治した国や宮廷を描いている。この王は，

…生前にはどの国を探してもあらゆる点でこのように秀れた君主はいないというほど高い名声をもっていました。彼には王にふさわしいものは何ひとつ欠けるところがありませんでした。彼は生まれながらの進行では近いをたてていた掟を守りました。その上，勇敢で賢く，また富裕で，憐れみの心と正義の心が，いつも一方に片寄ることがありませんでした。自分の言葉に忠実で，慈悲の心があり，名誉を重んじました。彼の精神は軸の中心のように一貫していました。若くて目ざめるばかりに新鮮で，強く，武具に身を固めては，彼の宮廷のどんな若い騎士にも負けぬほど熱心でありました。彼こそは容姿が美しく，幸運に恵まれていました。そしていつもとても王らしく立派にふるまったので，どこを探してもこのような人はほかにいませんでした。[8)]

さらに，この理想的な王，チンギスハンの誕生日に催された豪奢な宴会の様子が描かれており，そこで供された料理がいかに素晴らしいものであったかが説明されている。[9)] その席に，東洋から真鍮の馬に跨ってやって来た雄弁で凛々しい騎士が現れる。彼の主人は「アラビアとインドの王」[10)]であるという。チョーサーは名を挙げてはいないが，言うまでもなく，その王とは，12 世紀頃から中世の人々の口の端に掛かっていた伝説の英雄プレスター・ジョンのことである。[11)] その使いの騎士がチンギスハンへのお祝いに持ってきた品々は，空を飛びどこへでも即座に人を運ぶ真鍮の馬，様々な秘密の企てを映す鏡，鳥の言葉がわかるようになり，薬草の知識を与えてくれる指輪，そして最も強靭な鎧をも突き通す剣（しかし，その傷を同じ剣で触ると，すっかり癒えてしまう）であった。これら東からもたらされた数々の不思議なものは，明らかに東洋の優秀性を示している。

チョーサーと同時代の作品『ジョン・マンダヴィルの旅行記』（1357 年頃）に描かれた東洋像はどうであろうか。これはジョン・マンダヴィルというイギリス人が 1322 年に出帆し 35 年間世界を旅した記録である[12)]——とはいえ，あくまでそういう設定で書かれており，実際には様々

な古い記録をもとにして国内でまとめられたものであることがわかっている。[13] ある批評家は強烈な皮肉をこめて「ジョン・マンダヴィルがした最も遠い旅は，家のすぐそばにある図書館への旅だった」と述べている。[14] しかし，作品が世に出てから約2世紀にわたって真実の記録であると信じられていた。[15] コロンブスがアメリカを発見する旅に出る前に，この旅行記を読んだということが知られていたり，レオナルド・ダ・ビンチも所蔵していたことからも，[16] 多くの人に実用の書としても読まれた時代があったことがわかる。英語，フランス語，チェコ語，デンマーク語，オランダ語，ドイツ語，アイルランド語，スペイン語による『旅行記』が現存するが，原文はフランス語であったと考えられている。[17] ジョン・マンダヴィルが実在の人物であったかどうかについては，まだ結論がでていない。[18]

旅行記という形態をとっているので，ここには東洋が広い地域にわたって，事細かに紹介される。現在の東洋のどの場所について言っているのかが明確でない場合もあるが，主なものをかいつまんでみる。

インドには「水晶の岩に良質のダイヤ」があり，「それと同様，海や山でも，堅硬物の岩の上に，はしばみの実のように乳色をした，良質の，固いダイヤが発見される」。不思議なことにそれらは「雄雌とも，群生して，天国の露をのんで成長する。さらに，いわば彼らなりに，受胎して，小さな子を生み，そんなぐあいにして，たえず繁殖し，成長しつづける」という。[19] そしてダイヤの効能や鑑定方法も述べられている。

かつてアレキサンドロス大王(356 B. C. —323 B. C.)との戦いがあったというカナ島では「ぶどう酒と穀類がきわめて豊富」[20]であり，「ライオン，豹，熊その他の多くの野獣が棲息し」[21]，「犬ほどもある鼠」[22]がいる。サルキエは「美しい，りっぱな都で，多くのキリスト教徒や，りっぱな信仰をもった人々が住んでいる。…この国では…胡椒が生育している」[23]。そしてレモンを使った軟膏によって蛇や毒虫を追い払う方法[24]が述べられている。ポロンベ市には「断食してその水を三度飲めば，どんな病気にかかっていても全快する」というわれる井戸があり，[25] ジョン・マンダヴィルもこの水を飲み，体調がすこぶる良くなったと述べている。この水は「青春の泉」とも呼ばれ，飲めば年をとらないそうである。[26] 牛は神様であり，その尿は神聖なものとして有り難がられている。[27] スマトラは非常に熱い土地なので，皆裸で暮らし，恥ずかしがらない。つまり，アダムとイブが楽園を追放される前の状態である。そして結婚は存在せず「女はすべて，あらゆる男の共有なのである」。しかし，これは否定的に書かれていない。何故なら「神はアダムとイヴに…『生めよ，ふやせよ，大地をみたせ』といわれたから，それに逆らったら，大罪を犯すことになる」[28]と説明しているからである。「土地は豊かで，獣肉も魚肉も穀類も，さらにまた金銀その他の物質も，たくさん産するのに」商人から太った子供の肉を買って食べる。「彼

らの話では，人肉は世界じゅうでいちばん美味な馳走だということである[29]」。ジャワは驚くほど人口が多く，「種々様々な香辛料が他のどこよりも大量に栽培されている[30]」。「この国の王は豪奢で，美麗な宮殿をかまえている。王の広間や部屋へ通じている階段はすべて，金か銀かでこしらえてある。広間や部屋の床もまた金銀作りである[31]。」放り込まれたら絶対に見つからない底なしの死海があると思えば，千人以上もの美女を抱いた王様[32]，巨大な蝸牛[33]がいる。恐ろしい風習があって，夫が亡くなると妻が一緒に生き埋めにされたり，危篤の知人を安楽死させるために大きな犬をけしかけて殺し，その死体の肉を食らう[34]という。また父は息子を，息子は父を，夫は妻を，妻は夫を食べる習慣[35]があり，死ぬことが予言されれば，夫を息子と共謀して窒息死させ，その肉を食らう。しかし，これは死後，体がウジ虫に食われないようにするための救いの策だという[36]。60の色彩をもった宝石[37]があり，年に一度，貧しい人々に宝石で満ちた湖に入り好きなだけ取ることを許可する寛大な王様[38]も描かれている。奇妙な動物や人間も登場する。例えば，頭が二つある野がも，牛ほど大きな白狼[39]，一つ目で頭がなく，「目は両方の肩につき，口は馬蹄のような形をして丸く，しかも，胸のまん中についている」人間。さらに，別の島にも，「やはり頭のない人間が住み，両の目と口は彼の肩のうしろについている。鼻も目もない偏平な顔をした人間は目のかわりに，小さな2つの穴を持ち，平べったい口には，唇がない。上唇がひどく大きく眠るときにその唇で顔じゅうを覆ってしまう怪物[40]」がいる。また「耳が異様に長く，膝まで垂れ下がっている人々，馬のような足をした人間，両性の性器を備えた人，恐ろしく太い片足をもっているので，それが体全体を覆い，太陽の光さえ遮って日陰を作ってしまうほど[41]」の人間もいる。

しかし，文明化された場所も多く描写されている。「以上の島々から海路でなん日も東へむかうと，マンシーと呼ばれる一大王国に達する。それは大インドの中にあって，人間の支配下にあるかぎりでは，最も優れた土地で，あらゆる物質が最も豊饒なところである。この国には，多くのキリスト教徒がサラセン人といっしょに住んでいるが，それは国が広くて，肥沃だからである。国内には，二千以上のすばらしい都市があるほか，りっぱな町も多い。インドの国はどこよりも最も人口の多い国であるが，それは国内に商品がきわめて豊富なせいである。この国には，乞食もいなければ，貧乏人もいない[42]」。「この国随一の，海に近い都市はラトリンと呼ばれ，パリよりも大きい。この都内を大きな河が貫流していて，船舶の航行も自由である。…世界じゅう探しても，これほど整った，これほど多くの船舶をもち，これほど強大な港をそなえた都市は他にない[43]」。陸路でさらに何日も旅を続けるとカッサイという別の都市があり大勢の人と多くの門があり，町はヴェネチアが建設されたのと同じ様式で作られている。上等なぶどう酒，行儀正しい動物たちがいる[44]。「カタイ［シナ］の国は広大で，美しく，肥沃な国土で，りっ

ぱな商品にあふれている。だから，毎年，商人たちが香料その他の商品を買いに，ほかの国よりも足繁くこの国へやってくる。ついでながら，ヴェネチアまたはジェノア，あるいはまた，ロンヴァルディアまたはイタリアからやってくる商人はシナに達するまで，海陸両路で11か月，もしくは12か月の旅程が必要で，このシナは大汗の主要な領土である[45]」。金銀宝石で散りばめられた豪華な宮殿と宮廷内部の様子，豊かな果樹園，池や湖とそこにいるさまざまな鳥や動物，食事の回数が一日一回で，食べ物を直接膝の上におき，パンは食せずあらゆる種類の獣肉を食べている等，モンゴルの物質的豊かさと宮廷の風習，庶民の暮らしを述べる。プレスター・ジョンの領土についても，その絢爛無比の宮殿の様子，黄金，宝石，鳥，香料，蜂蜜，乳が豊富であること，火に燃えない不思議な樹木，キリン，白いライオン，足が6本ある熊くらいの大きさでライオンの尾をもった猪の頭をした獣がいること等が述べられている。

この旅行記にあらわれる東洋のイメージをまとめると，次のようになろう。東洋は黄金や宝石，香料等，高価な品々に満ち，強力な支配者が見事な宮殿に暮らしている。整備され非常に文明化の進んだ大都市も建設され商業が栄えている。人々は信仰心厚く，キリスト教徒も異教徒も仲良く生活している。同時に，恐ろしい獣や怪物，奇妙な姿をした人間もおり，民間には信じられないような野蛮な風習もあるが，彼らなりの正当な理由があって行われている。東洋は未だよくわからぬ場所である故に，奇怪さにも満ちているが，概して，物質的に豊かな憧れるべき土地という良い印象が強く打ち出されている。というのも，東洋は，パラダイスにより近いと考えられていたからに他ならない。マンダヴィルの旅行記にはこう記されている。

「今わたしが語った島々や，プレスター・ジョンの支配下にある砂漠からさきは，東へいっても，人の住む土地は皆無で，荒原と砂漠と，大岩と山と，暗黒の国があるばかりで，土地の人々の話では，そこでは昼も夜も，なにも見えないそうである。そして，その暗黒の国とそれらの砂漠はまっすぐ地上の楽園へのびている。かつて，この楽園にはアダムとイブが住んでいたが，それもつかのまであった。…地上の楽園は，噂によると，世界じゅうで最高の土地である。あまりに高いので，月の周辺にとどかんばかりである。ノアの洪水が大地をことごとく覆いつくしたさいにも，あまりに高くて，この楽園には達しなかったのである。楽園の周囲は壁ですっかりとざされているが，その壁がなんで出来ているのかは，だれにもわからない。一面に苔生して，こけと灌木ですっかり覆いつくされているため，石も見えなければ，たといほかのどんな材料で作ってあっても，ぜんぜんなにも見えないわけである。楽園の壁は南から北へのび，永久に燃えつづけている火のせいで，入り口も開いていない。この火は燃える剣と呼ばれ，なにびとも中へはいれないように，神が入口の前においたのである[46]。

楽園がこの世の最も高い所にあったことは，13世紀に描かれ，現存するヘレフォードの世界

地図からも知ることができる[47]。この地図では，中世においてほとんどの世界地図がそうであったように，真上が東で，世界を表す円はまず上下水平2つに分けられ，その下の半円の左半分が，ヨーロッパ，右半分がアフリカという位置づけになっていた[48]。世界の頂点にあるのがパラダイスである。東洋は楽園により近かったと考えられていたために，中世の人々にとって近づき難く，富裕で幸福に満ちた場所としてとらえられていたと思われる。実際，中世文学に現れる楽園や天国，あの世の描写と，この旅行記に見られるような，当時，人々が抱いていた東洋のイメージは類似し，重なる部分が多い[49]。

チョーサーやジョン・マンダヴィルの旅行記より以前に，イタリア人マルコ・ポーロ（1254-1324）がベネチア商人[50]であった父親と叔父に連れられて，東洋へ出かけたことはよく知られている。ポーロは帰国後，ジェノバとの戦いに巻き込まれ捕虜になった時，獄中で東方での体験談を物語作者のルスティケロに筆録させ『東方見聞録』を仕上げたといわれている[51]。また，今に伝えられている有名なものに，東方へ派遣されたフランシスコ会の修道士ピアン・カルピーノやギョーム・ドゥ・リュブルックの体験を元にした著書がある[52]。次々と生まれるこの種の書物は，事実や現地での取材だけを元にした実録の場合もあれば，マンダヴィルのように，入手可能な書物から作り上げたようなものもあったであろう。いずれにせよ，こういった書物の類は人々に読み継がれてゆき，中世人の東洋観を形成する大きな要因の一つになったことに間違いはなかろう。

さらに時代を遡って，ラテン語で筆写された *Liber monstrorum de diversis genenribus*（『様々な怪物の本』）にも東洋が描かれている。9～10世紀の写本が5つ現存しており[53]，原作はアイルランド人あるいはアングロ・サクソン人の手により650年頃から750年頃の間に書かれたと考えられている[54]。この作品には約120もの怪物が登場し，3つの巻に分けられそれぞれ奇妙な人，獣，蛇が解説されている。

東洋について書かれている箇所だけを取り上げてみると，変わった人間の類として，インドには毛むくじゃらで水と生魚を食べて生きている人々や[55]，頭が犬の形でわんわん吠える人間がいる[56]。またある者は，足が非常に大きく自分の体全体をおおう日陰を作ることができたり[57]，顎髭の長い人間，両性具有の種族がいる。さらに，頭がなく胸に顔があり，肩に目がついている人間がいる[58]。そして，生肉と純粋の蜂蜜を食べて生きているたいへん美しい種族[59]も登場すれば，人生の短い種族は5歳で懐妊し，8年以上は生きられない[60]。目がランタンのように輝く人間[61]，15フィートの背丈で，体は大理石のように白く，扇のような大きな耳をしているので夜には自分の体をその中へ入れて眠る怪物がいる。それは人を見ると，耳を使って急いで逃げてゆく[62]。竜の尻尾をもった人間[63]，人面で胸は半野生的，お臍から下は魚[64]のような人も住むという。獣で

は，当時珍しかったライオン，象――アレキサンドロスはアリストテレスに白，黒，赤，様々な色の象を見たと述べている[65]――，虎，大山猫，豹[66]，カバ，クロコダイル[67]，サイ[68]，そして，黄金と宝石を産出するガンジス河にはさらに恐ろしい怪物もいるが，作家たちはあまりの恐ろしさにそれを文章にできないという[69]。また，狐の大きさの鼠がアレキサンドロスによって報告されており，それらは人や荷車を引く動物をかみ殺す[70]。尻尾が二本あり両方のかぎ爪を開くと6フィートにもなり，人を殺す動物もいる[71]。アレキサンドロスが退治したという大きな金色，白，紫，黒い色にぎらぎらと輝く蛇，さまざまな恐ろしい蛇類[72]，首の中にエメラルドがはいっている蛇――その餌は白胡椒で，アレキサンドロスはこの宝石をいくつか持ち帰り，それらをピラミッドの中に隠し込んでしまったという[73]。河や池に住む蛇は太股より太く真っ赤な色をしている[74]。

つまり，東洋（主にこの本ではインドと呼ばれる所であるが）は奇妙な人間，奇怪な獣，そして種々の恐ろしい蛇がいる場所として描かれている。そしてインドは「本に書かれている世界のほとんどすべての不思議なものが存在する場所」であると記されている[75]。

この『怪物の本』には，Augustine, *De civitate Dei*, Vergil, *Aeneid*, Isidore, *Etymologiae*, Jerome, *Vita S. Pauli*, Pliny, *Historia Naturalis*, Ovid, *Metamorphoses*, Servius, *In Aeneidos*, Servius, *In Georgica, Letter of Alexander to Aristotle, Wonders of the East* 等の作品が使用されていることがわかっている。中でも非常に重要な源となっているのが最後の2つの作品である[76]。

Wonders of the East（『東方の不思議』）は元はラテン語で書かれ，古英語の訳もあり，いずれの言語による写本も現存している[77]。そこに現れるのは，蛇，豊かな胡椒，それを守る蛇，馬のたてがみと猪の牙と犬の頭をもつ半犬動物，生魚を食べる顎髭の長い人間，犬ほどある蟻，象などである。そして，1つの頭に2つの顔をもつ人間，ライオンのたてがみを持ち，扇のような口をした人間，ロバの耳と羊の毛，鳥の足をもつ動物，頭がなく，目と口が胸についている人，多くの竜，お臍からは下はロバで鳥の脚をもつ半人，大きな頭と扇のような耳をもつ人間，宝石のような実をつける黄金のブドウ畑，ひげのはえた女性，長い髪とイノシシの牙そして大理石のように白い肌とらくだの足をもつ女性（これはアレクサンドロスによって殺された）がいる。気前のよい東洋の国の人々は異国人を歓待してやがて国を去る時には女性を手土産にもって帰らせるという。宝石のなる木，4本足で鶏の尻尾を持つ動物，鷹の頭をもつ鳥なども登場する[78]。

この作品でも，東洋は不思議な人間，奇妙な動物，宝石などが存在する場所として描かれている。ここにも言及されているアレクサンドロス大王は20歳でマケドニア王となり，2年後に

東方遠征に出て，ペルシャを滅ぼし東西両大陸にまたがる大帝国を建設した。[79] そのアレキサンドロスの師，アリストテレスに送った手紙に表れる東方はどうであろうか。*Letter of Alexander to Aristotle*（『アレキサンドロスのアリストテレスへの書簡』）には，次のように書かれている。インドには多くの象がおり，町の壁は黄金，果樹園には黄金や水晶，エメラルドの果実がなる。宮殿は黄金と象牙，宝石，水晶に満ちあふれ，野山には蛇や野生動物がたくさんいる。頭が2つ，時には3つの蛇はその息で人を殺してしまい，牛ほどの大きさの白いライオン，大イノシシがおり，鳩ほどのコウモリには人間のような歯がはえていて，人にかみつく。また，サイ，狐の大きさの鼠，恐ろしい夜鳥がいる。暗く，航海不可能な海があり，月型の頭をしたワニ，平原に行くと鯨を食べて生きている巨大な裸の毛だらけの男女が暮らしている。強い風と激しい吹雪はすぐ止むが，その直後には真っ黒な空から燃えさかる炎が落ちてくる。インド語とギリシャ語で話す「月と太陽の木」は予言能力をもっている。その木の周辺は雨も鳥も野生動物も蛇もいない。その木は血の汚れを嫌うので，生け贄を捧げることは許されない。いかなる殺生も禁じられていたのである。アレキサンドロスは，300歳で，歯以外はすべて黒い司教にこの「月と太陽の木」へと導かれ，アレキサンドロスがやがてバビロンで毒殺されること，母親は路上で亡くなること，妹たちは幸せに天寿を全うすることをこの木は予言する。また，ピューマと虎の皮の服を着た男女の暮らす場所は広々して快適で，よい香りに満ちている。その香りは木の枝からくるもので，人々はその香りを食べて生きている。その土地の美しさには驚くほどである。[80] ここにも恐ろしい東洋が描かれているが，「月と太陽の木」が生えている楽園があることがわかる。

今回取り上げた作品に共通する東方のイメージをまとめると，東洋には恐ろしい獣や奇妙な人間が住むが，宝石や香料に満ちている土地が多く，強力な統治者も存在し，その果てには人間が容易には近づけない地上の楽園がある，ということになろう。決して悪いイメージだけが強調されている訳ではない。むしろ，中世の西洋人が羨むべき点も多くあるように描かれている。

ここで見てきた東洋観と，ギラルドゥス・カンブレンシスの東方の描き方には大きなギャップがあると思われる。そこで，最初の疑問について考えてみたい。何故，ギラルドゥスは東洋を非常に悪く書いたのか。彼は東洋を嫌っていたのだろうか。答えは否であろう。アイルランドは西の果てであり，ギラルドゥスがそう理解していたことは，「他所からとり残されたかのような世界の隅のひとつ，さい果てのアイルランドの地」[81] また，「西の島々の中でさい果てに位置するこの島」[82] とも述べていることから明らかである。ギラルドゥスは，中世の知識人として当然，東洋についての様々な話や記録を読んだり，聴いたりしていたであろう。[83] 自己主張が異常

に強く皮肉屋でもあった彼は「東方の不思議」ならぬ「西方の不思議」とでもいうべきものを，書いてやろうと思ったに違いない。そのため，ことさら東方の悪いところを強調して，「西方の果て」のアイルランドこそ，最も過ごしやすい穏和な気候をもつ場所であることを分かりやすく説明しようとしたのであろう。東洋には種々さまざま，うようよいるという邪悪な蛇は，アイルランドには一匹もいない。これは，聖パトリックが追い払ったので棲息しなくなったという伝説で有名である[84]。蛇についてアイルランドと東洋はまさに対照的に描かれている。

注目すべきことは，ギラルドゥスはアイルランド人でもないのに，このように東洋と比較している章において，「われわれ」という代名詞を使っていることである[85]。東方についてギラルドゥスが書いていた時，彼は明らかに「アイルランド」対「東洋」ではなく「西」対「東」としてその国を描いていたと思われる。

では，どうして，こんなに長々と東方について述べる必要があったのか，という点については，彼の書く「西方の不思議」が「東方の不思議」のパロディであることを鮮明にするためであったと考えられる。そして，もう一つには，イングランドとウェールズに対するギラルドゥスの複雑な愛国心のために，ブリテン島の「西方」にあるウェールズとその「東」にあるイングランドを無意識のうちに対比させることになったのではないか，ということである。彼は，強力な豪族であったウェールズ人と王族のアングロ・ノルマンの両方の血統を受け継いだおかげで，ヘンリ２世の宮廷で外交官として活躍することになったが，他方，ウェールズ人の血のためにウェールズのセント・デイヴィッズの司教になることが出来なかった。というのは，ウェールズの独立運動を起こし，カンタベリ大司教に忠誠を誓わなくなる危険があるかもしれないと，イングランドの支配者らが恐れたからである。ギラルドゥスは，晩年までセント・デイヴィッズの司教になる望みを頑固に捨てなかったが，結局は夢破れた。その間の何度もの挫折感が，西方対東方を書く時に，ウェールズ対イングランド，あるいは，ケルト人対アングロ・サクソン人という図式を彼の心の中に思い描かせたのかもしれない。しかし，『アイルランド地誌』はヘンリ２世に捧げられたものである故に，当然，表面的にはイングランドの人間としての立場をとって書かれている。王のことを「西方のアレキサンドロスたるヘンリ２世[86]」と呼んでいるのも興味深い。

しかし，イングランド北部の若者が眠っている間に蛇が口から内蔵にまで入り込み，裂こうとして苦しんだ時に，イングランドのどんな聖地を訪れても無駄で，アイルランドの水を飲んだら簡単に治ったという話が出てくる[87]。また，アイルランドでカエルが見つかった時，驚いたアイルランドのオソリの王が，それは，イングランド人がやってきて征服を狙う悪い前兆だと述べたという[88]。そして，鐘，杖がアイルランド，スコットランド，ウェールズの人々に尊重さ

れている[89]という部分には，ケルト人としてのギラルドゥスのスコットランドおよびアイルランドの人々との仲間意識が感じられる。古代アイルランドの積石についての箇所ではケルト人のサクソン人に対する敵意が表現されている[90]。また，ブリタニアの王でありケルト人であるアーサー王にアイルランド王は貢納の義務を負っていた[91]という記述には，ギラルドゥスはイングランド人ではなく，ケルト人の優越性を強調したかったように思われる。支配者側であったフランス人についても悪い感情を表現していると思われる。というのは，第2部の24章ではライオンと関係をもった不敬なパリの女について述べているが[92]，この章はこの「スキャンダル」のみを扱っていて，アイルランドに関係のある記述は一切無いからである。

『アイルランド地誌』の中で，ギラルドゥス・カンブレンシスが東方を悪く描いたのは，東洋に対する嫌悪によるというより，むしろアイルランドの気候の温和さを表現するために，当時よく知られていた「東方の驚異」を茶化した「西洋の驚異」とでもいうべきものを「地誌」というジャンルの作品の中に取り入れたいという悪戯心があったのであろう。そして，それと同時に，自分にウェールズ人つまりケルトの血が流れていたために人生の成功を味わうことができなかったギラルドゥスが，『アイルランド地誌』を執筆しているうちに同じケルト人として，故郷のウェールズと，やはりイングランドに抑圧されていたケルト人の国アイルランドとが重なりあい，ウェールズとアイルランドの両方の東に位置するイングランドを無意識のうちに——あるいは，宮廷でこの本が読まれた時には気づかれないように——邪悪な「東方」として描いたのかもしれない[93]。

註

1） *The Autobiography of Giraldus Cambrensis* edited and translated by H. E. Butler (London 1937), pp. 86-7.

2） Sean Duffy, *Ireland in the Middle Ages* (London 1997), p. 94.

3） Butler, *The Autobiography*, p. 86; *Expugnatio Hibernica, The Conquest of Ireland by Giraldus Cambrensis* edited with translation and historical notes by A. B. Scott and F. X. Martin (Dublin 1978), pp. xiv-xv.

4） John J. O'Meara, *The First Version of the Topography of Ireland* (Dundalk 1951).

5） ギラルドゥス・カンブレンシス（有光秀行訳）『アイルランド地誌』（東京 1996 年），pp. 18-19.

6） Duffy, *Ireland*, p. 8.

7） 有光『アイルランド地誌』，pp. 86-94.

8） 桝井廸夫訳　チョーサー『カンタベリー物語』（中）（東京 1995 年），p. 220.

9） ただし，白鳥，若鷺とともに料理に出てきた「ある種の肉」は「この国［イギリス］では大した値打ちもないと人から顧みられて」（*ibid.*, p. 222）いない。これは恐らくネズミであろう。これについては和田葉子「中世西欧が見た東洋」『泊園』第 39 号（2000 年），pp. 32-73 at pp. 39-41; *The Travels of Sir John Mandeville* translated with an introduction by C. W. R. D. Moseley (Harmondsworth 1983), p.

158 参照。

10) 桝井『カンタベリー物語』, p. 224.

11) 和田「中世西欧」, pp. 47-9.

12) Moseley, *The Travels*, p. 189.

13) Moseley, *The Travels*, pp. 12-14 ; Iain Macleod Higgins, *Writing East. The 'Travels' of Sir John Mandeville* (Philadelphia Penn. 1997).

14) Moseley, *The Travels*, p. 12.

15) *Ibid*., p. 9.

16) *Ibid*., p. 9.

17) 大場正史訳 J・マンデヴィル『東方旅行記』(東京 1964 年) ; Malcolm Letts, *Sir John Mandeville. The Man and his Book* (London 1949).

18) Moseley, *The Travels*, pp. 9-11 ; M. C. Seymour, *Sir John Mandeville* (Aldershot 1993).

19) 大場『東方』p. 123.

20) *Ibid*., p. 131.

21) *Ibid*., p. 132.

22) *Ibid*., p. 132.

23) *Ibid*., p. 135.

24) *Ibid*., p. 137.

25) *Ibid*., p. 137.

26) *Ibid*., p. 138.

27) *Ibid*., p. 138.

28) *Ibid*., p. 148.

29) *Ibid*., p. 149.

30) *Ibid*., p. 152.

31) *Ibid*., p. 152.

32) *Ibid*., p. 154.

33) *Ibid*., p. 155.

34) *Ibid*., p. 156.

35) *Ibid*., p. 166.

36) *Ibid*., pp. 166-7.

37) *Ibid*., p. 157.

38) *Ibid*., p. 158.

39) *Ibid*., p. 159.

40) *Ibid*., p. 167. なお，平成 11 年 11 月，筆者が泊園記念講座で「中世西洋の中の東洋」と題する講演を行った直後，関西大学文学部中国語中国文学科の森瀬壽三教授がこれらに出てくる奇怪な人間や動物が『山海経』とそっくりだということをご教示いただいた。森瀬教授に心より感謝する次第である。

41) *Ibid*., p. 168.

42) *Ibid*., pp. 168-9.

43) *Ibid*., p. 169.

44) *Ibid*., pp. 170-1.

45) *Ibid*., p. 179.

46) *Ibid*., pp. 267-8.

47) Meryl Jancey, *Mappa Mundi. The Map of the World in Hereford Cathedral* (Hereford 1987) ; P. D. A. Harvey, *Mappa Mundi. The Hereford World Map* (London 1996) ; George H. T. Kimble, *Geography in the Middle Ages* (London 1938).

48) 和田『中世西欧』, pp. 66-9.

49) H. R. Patch, *The Other World according to Descriptions in Medieval Literature* (Cambridge Mass. 1950), pp. 134-74 ; Ad Putter, 'Walewein in the Otherworld and the Land of Prester John', *Arthurian Literature.* 17 (1999) 79-99.

50) マルコ・ポーロの時代におけるヨーロッパの人々の商業活動については，ジャン・ファヴィエ（内田日出海訳）『金と香辛料——中世における実業家の誕生』（東京 1997 年），E & F・B. ユイグ（藤野邦夫訳）『スパイスが変えた世界史——コショウ・アジア・海をめぐる物語』（東京 1998 年）参照。

51) 佐口透『マルコ=ポーロ　東西を結んだ歴史の証人』（東京 1984 年）；愛宕松男訳注『マルコ・ポーロ東方見聞録』（東京 1970—71 年）.

52) Henry Yule, *Cathay and the Way Thither,* vols 2 and 3 (London 1913 and 1914 respectively).

53) MSS Wolfenbüttel, Herzog-August Bibliothek, Gudianus lat. 148 ; St Gallen, Stiftsbibliothek, 237 ; Leiden, Bibliotheek der Universiteit, Voss. lat. oct. 60 ; New York, Pierpont Morgan Library, 906 ; London, British Library, Royal 15. B. xix.

54) Michael Lapidge, '*Beowulf*, Aldhelm, the *Liber Monstrorum* and Wessex', *Studi Medievali*, 3rd series, 23 (1982), pp. 151-92 at pp. 164-5.

55) Andy Orchard, *Pride and Prodigies. Studies in the Monsters of the Beowulf-Manuscript* (Cambridge 1995), p. 268.

56) *Ibid.*, p. 268.

57) *Ibid.*, p. 268.

58) *Ibid.*, p. 272.

59) *Ibid.*, p. 272.

60) *Ibid.*, p. 274.

61) *Ibid.*, p. 278.

62) *Ibid.*, p. 280.

63) *Ibid.*, p. 284.

64) *Ibid.*, p. 286.

65) *Ibid.*, p. 290.

66) *Ibid.*, p. 292.

67) *Ibid.*, p. 294.

68) *Ibid.*, p. 296.

69) *Ibid.*, p. 302.

70) *Ibid.*, p. 302.

71) *Ibid.*, p. 306.

72) *Ibid.*, p. 308.

73) *Ibid.*, p. 310.

74) *Ibid.*, p. 314.

75) *Ibid.*, p. 300.

76) *Ibid.*, p. 87.

77) *Ibid.*, pp. 175 and 183.

78) *Ibid*., pp. 184-203. Cf. 『東方の不思議』に現れた怪物たちがこれまでどのように文学や芸術作品に表れてきたかを論じたものに Rudolf Wittkower, 'Marvels of the East, A Study in the History of Monsters', *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes* 5(1942) 159-97 がある。

79) 森谷公俊『アレキサンドロス大王　「世界征服者」の虚像と実像』(東京 2000 年)；ピエール・ブリアン（桜井万里子監修）『アレクサンダー大王未完の世界帝国』(東京 1991 年)

80) Orchard, *Pride*, pp. 204-53.

81) 有光『アイルランド地誌』, p. 16.

82) *Ibid*., p. 25.

83) *Ibid*., p. 28.

84) David Hugh Farmer, *The Oxford Dictionary of Saints* (Oxford 1982), p. 314.

85) ちなみに,『アイルランド地誌』の第 3 部に入ると，自然のすばらしさを賞賛したのとは正反対に，アイルランド人の野蛮さを徹底的に軽蔑しているかのようである。各章につけられたタイトルをいくつか見るだけで，それがわかる。例えば以下のようなものがある。「アイルランド人がキリスト教信仰のいろはにもじつに無知なこと」「彼らのよこしまさ，裏切り」「棒のかわりであるかのように，いつも手に斧を持っていること」「よこしまさの証拠　聞いたことのない『婚約』のやり方」「他所もこの悪徳に汚れること」「前代未聞の異常な王権・支配権の確認法」。

86) 有光『アイルランド地誌』, p. 257.

87) *Ibid*., pp. 80-1.

88) *Ibid*., p. 82.

89) *Ibid*., p. 240.

90) *Ibid*., p. 129.

91) *Ibid*., pp. 200-1.

92) *Ibid*., p. 143.

93) この論文は平成 12 年度関西大学学部共同研究費の助成によって執筆された。